

Title	台湾における言語使用の実態 : 嘉義県公立D小学校 「郷土言語」履修者を事例に
Author(s)	呉, 素汝
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2018, 2017, p. 19-30
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70000
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

台湾における言語使用の実態

—嘉義県公立 D 小学校「郷土言語」履修者を事例に—

呉素汝

1. はじめに

台湾は 300 年以上にわたってオランダ(1624-1662)、鄭氏(1662-1683)、清朝(1683-1895)、日本(1895-1945)、そして国民党政府(1949-1996)¹など、5つの外部政権が入れ替わり、植民地として支配された。なかでも、言語同化政策の推進や移民などによって、台湾では現在、原住民²諸語、閩南(びんなん)語³、客家(はっか)語、日本語、「国語(台湾中国語、以下同様)」⁴など、複数の言語が混在している。

とはいえ、特に国民党政府は「国家団結のための言語統一、つまり国語の普及に一層の力を注ぐようになっていく」(松尾 2006a, p.19)ため、1950 年代に「説國語運動(国語を話す運動)」を推進し、閩南語、客家語と原住民諸語を学校から追放したうえで、公的な場での使用さえも禁止していた。これにより、国語の絶対性が貫徹されるようになった(山崎 2009, p.179)。さらに、現在台湾の人々の言語使用状況に変化がもたらされた。この点については、行政院主計總處(2012)や黄他(2014)などの先行研究は、年齢が若ければ若いほど、国語が使われる傾向があることを明らかにしている。

しかし他方で、台湾では 2001 年度⁵より新しい義務教育制度——「國民中小學校九年一貫課程(国民小中学校九年一貫カリキュラム、以下「九年一貫カリキュラム」と略称)」が実施され、「郷土言語(閩南語、客家語、原住民諸語)」の教育が小中学校において始まった。このような学校における言語教育の多様化が進行するなか、郷土言語教育を受ける人たちが普段、国語以外の言語を使っていないのであろうか。仮に国語以外の言語が使われているならば、(それら)の言語が国語と同様のパターンで使われているのであろうか。

この問題意識の下、本稿ではまず、台湾社会の言語事情を概観し、実際に台湾南部地域における嘉義県公立 D 小学校で郷土言語教育を受けている人たち(いわゆる児童)を対象に、筆者が 2015 年 3 月に行ったインタビュー調査から、彼らの言語使用の実態を報告する。

¹ 各植民地時代の区分は、陳(2011, p.104)に基づいたものである。

² 台湾の先住民族の呼称。台湾中国語では「原住民」という表現は「元から台湾に居住していた人たち」を指し、差別的な意味を持たず、公式に使われている。そのため、本稿では「原住民」と記す。

³ 台湾では一般に、閩南語のことを「台語(台湾語)」と呼ぶ。また、「ホーロー語」と呼ぶこともあるが、本稿では「閩南語」と記述する。ただし、文献資料などの引用、調査協力者のインタビューの語りに際して「台湾語」、「ホーロー語」という記述がある場合、「閩南語」のことを指す。

⁴ 台湾では「国語」というものは、1945 年に第二次世界大戦終戦後、中国から渡来してきた国民党政府が持ち込んできた北京官話を基調として体系化された中国語でありながら、長年にわたって閩南語や客家語と接触していたため、現在中国で使われている共通語(いわゆる普通話)と異なっている部分があり、独自の特徴が形成されている(簡 2002, p.19「掲注 1」)。

⁵ 台湾では、新年度・新学期は 9 月からである。

2. 台湾社会の言語事情

2.1. 「台湾人」ならびに言語の構成

中華民国内政部統計處(中華民国内政部統計サイト)⁶によると、台湾の人口は2017年末時点で2,355万4,803人を有しており、原住民族、閩南人、客家人と外省(がいしょう)人という4つのエスニックグループに加えて、国際結婚によって台湾国籍を取得し帰化している外国籍配偶者たちから成り立っている。それぞれの人口と言語については、表1に示す。ただし、ここで注意すべき点が2つある。1つは、表1に示す原住民族の人口率は政府が公表した統計結果⁷を、閩南人、客家人と外省人の人口率は日本統治時代に実施された戸口調査に記された本籍地に基づいて推計している黄(1994, pp.19-37)を参照したものである。もう1つは、外国籍配偶者の人口を示す単位は、政府が統計した実際の人数である。また、これまで台湾を研究対象とし、台湾社会の人口構成について記述している研究の中で、4つのエスニックグループのみを扱ったものは少なくない(例えば、簡2002、松尾2006a)。しかし、近年、国際結婚によって移住してきた外国籍配偶者は、台湾社会の構成員として見なされる傾向があり、実際に「新住民」という言葉で呼ばれている⁸。したがって、本稿では、外国籍配偶者をあえて、台湾社会の構成員の1つとして記述することとする。

表1 台湾の人口と言語について

社会の構成員	概要	言語	人口率
原住民族	16世紀以前、すでに台湾に定住している人たち アミ族、パイワン族、ブヌン族などの16族を数える ⁹	アミ語、パイワン語など	2.37%
閩南人	17世紀頃、鄭氏の一族に従って、中国福建省南部から移住してきた人たち	閩南語	73.3%
客家人	閩南人よりやや遅く、中国広東省周辺から移住してきた人たち	客家語	12.0%
外省人	1945年終戦後、国民党政府とともに中国各地から渡ってきた人たち	中国各地の 地方言語	13.0%
外国籍配偶者	2018年2月末時点、外国籍配偶者全員、53万2,208人 ¹⁰ 中国籍配偶者(香港・マカオを含む)：35万4,515人 他の外国籍配偶者：17万7,693人(内、台湾に帰化していない者：5万5,959人) ベトナム(18.98%)、インドネシア(5.54%)、タイ(1.64%)、フィリピン(1.72%)、 カンボジア(0.81%)、日本(0.90%)、韓国(0.30%)、その他(3.50%)		

※ 表1は黄(1994)、簡(2002)、松尾(2006a)などの研究を参照に、筆者が作成した。

※ 「他の外国籍配偶者」の下に示す配偶者の出身国と人口率は、下線部分の内訳である。

⁶ 中華民国内政部統計處(掲載日2017/09/02)「(中華民國)106年第35週内政統計通報(我國人口性比例持續下降)」
[https://www.moi.gov.tw/chi/chi_site/stat/news_detail.aspx?sn=12684] 2018年2月26日最終参照日。

⁷ 中華民国内政部統計處(掲載日2018/01/20)「(中華民國)107年第3週((中華民國)106年底原住民族人口數較上年底增加1.1%，並以阿美族人數最多)」

[https://www.moi.gov.tw/stat/node.aspx?cate_sn=-1&belong_sn=7460&sn=7503] 2018年2月26日最終参照日。

⁸ 台北駐日経済文化代表処(掲載日2016/07/26)「台湾ニュース：東南アジア言語ガイド、新住民の新たな選択肢に」
[https://www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/35329.html] 2018年2月26日最終参照日。

⁹ 政府によって公式に認められている数。

¹⁰ 中華民国内政部移民署(掲載日2018/03/23)「(中華民國)107年2月：外籍配偶人數與大陸(含港澳)配偶人數按證件分」
[<https://www.immigration.gov.tw/ct.asp?xItem=1346321&ctNode=29699&mp=1>] 2018年03月30日最終参照日。

表1に示したように、人口率が最も高いのは閩南人である一方で、外省人、客家人と原住民族の順に、人口率が低くなっている。このことから、閩南語は他の言語より優勢だと考えられる。しかし、先述したように、閩南語や客家語の使用は、公的な場においては、国民党政府によって禁止された。また、実際、松尾(2006a)などの研究は、異なる世代間の言語選択と使用においては、閩南語から国語へと徐々にシフトしつつあることが見られたと報告している。人口的にマイノリティである客家人と原住民族の言語の使用と継承は言うまでもなく、世代間で断絶が起きており、また外省人の諸地方言語の流失も深刻になっている。だが、数の上でマジョリティである閩南人の言語までも、国語への言語シフトという現象が現れたことは、国語は台湾社会に深く染み込み、他の言語を飲み込む事態が続いていると言えよう。

外国籍配偶者の言語状況に関しては、Wu(2010, p.27)によれば、政府は1995年から外国籍配偶者を対象とする国語学習、生活適応などへの支援・指導コースを設け始めた。また、外国籍配偶者の需要などに応じて「新住民学習中心」における閩南語や客家語のクラスも開講されている(大紀元 2011/12/14)¹¹。さらに、外国籍配偶者の母語を伝承するための動きも存在しており、例えば、学校内では外国籍の親による自国の文化の紹介、絵本の読み聞かせ活動など(蘋果即時 2017/05/27)¹²のような、彼らの母語や母文化などの学習と交流活動が開催されている。つまり、外国籍配偶者が国語、閩南語や客家語などを学べる場が提供されているとともに、子どもたちが彼らの母語に触れることが可能な取り組みが進められている。

なお、1節にも述べたように、日本語も台湾に存在する言語の1つである。台湾は1895年から50年間ほど、日本に統治された。その中で、閩南語と客家語は、日本語と長期間にわたり密接に接触したため、日本語からの借用語が存在する。例えば、「～さん(～桑)」、「ハンドル」などの語彙が今なお使われている(陳 2011, p.105 ; 邱 2006, pp.447-448)。さらに、簡(2002)と林(2010)によれば、老年層(日本統治時代を経験した世代)が日常生活において日本語を使う場面がある。

このように、今日の台湾は被植民地支配者という歴史的要因に加えて、社会の人口構成が再編成され、またその再編成に伴い、各エスニックグループの言語、日本や国民党政府による統治の時期に持ち込まれてきた言語(日本語、国語)に加えて、国際結婚による移住者たちの母語も入り込んできており、独自性に富んだ多言語社会を形成している。ただし、国語は他の言語より社会的な威信を持っており、最も多用されている。

2.2. 台湾の言語政策—1990年代以降言語教育の多様化

これまで述べたように、国民党政府統治下では、戦前すでに台湾に伝わってきた閩南語や客家語が完全に排除され、一元的な国語教育が強制的に行われた。それゆえに、台湾における言

¹¹ 大紀元(掲載日 2011/12/14)「教育部生活學習楷模：桃縣外配獲表揚」
[<http://www.epochtimes.com/b5/11/12/14/n3456989.htm>] 2018年3月30日最終参照日。

¹² 蘋果即時(掲載日 2017/05/27)「『角落書櫃』讓新住民媽媽發光母語傳承不歇」
[<https://tw.appledaily.com/new/realtime/20170527/1127349/>] 2018年2月26日最終参照日。

語間の差別の状況が生み出された。このような中、1980年代以降、台湾の言語教育政策に大きな変化が生じて、多言語教育へと転換した。

1980年代後半からの民主化運動の進展と1987年の戒厳令の解除に伴い、台湾の歴史や言語などの主体性に対する探究という「台湾化」としての「本土化」¹³の意識が高まった。原住民族、閩南人と客家人はこの潮流に乗って、自らの言語を公の場に取り戻そうとして、母語の保護政策を施行するように要求し始めた(相川2010, p.64)。それに応じて、閩南語、客家語と原住民諸語が「郷土言語」という名の下で一体化させられ、1990年代前半は一部地域の小学校における課外授業ないし選択授業として始まり、1990年代後半からは正式な科目として教えられることが可能となった。しかし、正式な科目とはいえ、郷土言語は台湾の歴史、地理、自然科学、芸術という4分野とともに、週1コマの「郷土教学活動」という1科目として扱われており、学習時間と内容が非常に限られていた(郭他2015, p.5)。

一方、2001年以降、九年一貫カリキュラムが施行されるようになった。なかでも、多文化の尊重や国際化と本土化の趨勢に向き合っ、郷土言語は郷土教学活動から独立し、小中学校において正規の課程¹⁴として設けられると同時に、英語教育も必修科目として導入された¹⁵。つまり、台湾国内の民主化と本土化の過程において、台湾の学校教育は1990年代以降、国民党政府が推進した国語教育から多様になってきている。これにより、これまで学校から排除された閩南語、客家語と原住民諸語は郷土言語教育を通じて、国語が社会の隅々にまで浸透しつつある環境で生まれ育つ若い世代にとってより身近なものになっていくのであろう。

なおかつ、2019年度からは、東南アジア地域(ベトナム、インドネシア、タイ、ミャンマー、カンボジア、フィリピンとマレーシアの7カ国)からの外国籍配偶者の母語の教育が「新住民言語」という選択必修科目として小学校に導入されることは特筆される。こういった台湾社会で新たな構成員の1つである外国籍配偶者の母語や母文化を学校教育機関に取り組むことによって、学校の言語教育に収まらず、台湾社会に存在する言語文化の状況がより多様化し、複雑化していくことは疑う余地がない。

3. 小学校「郷土言語」履修者へのインタビュー調査

インタビュー調査は2015年3月に実施したもので、博士論文のための調査の一部である。ここで調査の手法にインタビューを選択した理由を述べておきたい。社会言語学は、人はどの言語を選び使用するかという問題を研究テーマの1つとして扱っている(小野原2004, p.30)。

¹³ 1949年末、国民党政府が「中華民国」という国家体制そのものを台湾に移転した後、「台湾が全中国を代表するという中国ナショナリズムの下、教育文化では中国国家文化(言語)が重視される反面、台湾の地方文化(言語)は一段低く位置づけられ、周辺化される結果がもたらされた」(菅野2013, p.239「掲注4」)。一方、1980年代半ば以降の民主化に伴い、国民党政府自体の「台湾化」のみならず、教育文化面でも「国民の歴史、文化、言語などが、中国を主体としたものから台湾を主体としたものへと変化する」(田上2012, p.123「掲注4」)こととなった。

¹⁴ 郷土言語の課程については、小学校では選択必修科目であり、中学校では自由選択科目である。

¹⁵ 教育部國民及學前教育署(掲載日未詳)「(中華民國)97年國民中小學校九年一貫課程綱要」による[http://www.k12ea.gov.tw/ap/sid17_law.aspx], 2018年03月31日最終参照日。

また、言語の選択と使用において、①参加者、②話題、③場面という3つの要素があるとされている。アンケート調査では、これらの要素に関する質問項目を設定することが可能であろう。しかし、例えば、調査協力者が生まれる前に祖母がすでに亡くなったことで、祖母とは話したことがない場合など、様々な可能性が考えられる。そういった場合は、アンケート記入者が答えず空欄のままにすると思われる一方で、無回答のように他者に知られたくない情報がある場合もなくはない。したがって、より全体の言語使用の状況、すなわち児童たちが中心に活動を行う場所であると言われる、家庭内と学校の2つの場面において、だれに対して何語を使ってどんな話題を話すかを明らかにするために、インタビュー調査を行った。ただし、調査対象とした学校では閩南語教育のみが行われているため、本稿で扱うデータは閩南語教育を受けている者についてであり、またインタビューを受けた児童の人数がきわめて少ないため、彼らの回答を台湾の全小学校における郷土言語の課程を履修する児童に一般化できないという点については留意されたい。

3.1. 調査協力者

インタビュー調査を受けた協力者は、台湾南部に位置する嘉義県における公立D小学校5学年7名である。以下、この7名について表2にまとめた。

表2 インタビュー協力者について

	性別	家庭の居住形態	最初に獲得した言語	学齢期以前に話せる言語
D1	男	祖父母、親、兄弟の3世代	国	国、台、英
D2	女	親、兄弟の2世代	英	国、閩、英
D3	女	親、兄弟の2世代	台	国、台
D4	男	祖父母、兄弟の2世代	台	国、台
D5	女	“阿祖” ¹⁶ 、祖父母、親、兄弟の4世代	国	国、台、英
D6	女	祖父母、協力者本人の2世代	国	国、閩、英
D7	男	親、兄弟の2世代	国	国、英

- ※ スペースの関係上、表2には、国語を「国」、閩南語を「閩」、台湾語を「台」、英語を「英」のように示す。
- ※ 脚注3でも示したが、「台湾語」は閩南語を指す。インタビューの結果内容を引用して表現する際に、協力者が使った表現のまま使用することにする。以下同様。
- ※ 「家庭の居住形態」に示す「祖父母」の中で、母方の祖父母と同居しているのは協力者D6のみであり、それ以外の協力者3名(D1、D4、D5)は父方の祖父母と同居している。

表2から、祖父母の世代だけと同居しているのはD4とD6であり、“阿祖”に加えて4世代と同居しているのはD5であり、祖父母と親と兄弟の3世代と同居しているのはD1であり、D2、D3とD7は親と兄弟の2世代と同居している。最初に獲得した言語については多い順に、国語、台湾語(閩南語)と英語である。一方、学齢期以前に話せる言語の状況からは、台湾社会では複数の言語が併存し、人々に幼少期から複数の言語を同時に習得させることが可能な環境が整っていることが示唆される。

¹⁶ “阿祖(a-tsóo)”という語は、閩南語でひいおじいさん・ひいおばあさんを指す。

調査対象とした嘉義県は、閩南語の分布地域の1つで(洪 2010, p.13)、65歳以上の老年人口が0-14歳の少年人口より多い地域である¹⁷。簡(2002)によると、そういった老年層が最も多用しているのはエスニックグループの固有言語である。これらにより、嘉義県における閩南語の使用率が高いと予想される。だが、表2をみれば、学齢期以前に国語と英語の2言語だけが話せるようになった協力者が1名(D7)いた。これは、嘉義県のような閩南語が分布している地域に暮らしているとしても、幼少期に必ずしも閩南語を身につけられるわけではないという可能性として見られる。

前掲したように、閩南語は老年層において多用されている。この点から、祖父母と同居している者はそうでない者より、家庭内で閩南語を多く使うと仮定した。しかしながら、インタビュー協力者の人数がきわめて少ないため、データから家庭内における言語使用と祖父母との同居についての関連性を分析することは妥当ではない。したがって、本稿では、上記の仮定を検討しないこととする。

3.2. 調査手法

調査は半構造化インタビューで国語(場合によっては閩南語の語彙を加えた)を用い、同時に録音する形式で行われた。言語使用の状況に関する主な質問項目は次のとおりである。

- ① 家と学校の2つの場面においては、どの言語を使っているか。
- ② 家族/学校の先生・同級生に対しては、どの言語を使って話しているか。
- ③ 国語/閩南語を使ってどんなことを話すか。

ただし、③の話題については、ほとんどの児童が思いつかなかったため、その傾向を観察できなかった。

4. 調査の結果

4.1. 家庭内

インタビューでは「家では何語を使っているか」という質問に対して、国語と答えた者は2名(D1、D7)、閩南語と答えた者は2名(D3、D4)、複数の言語と答えた者は3名である。複数回答の内訳は「国語と閩南語の混用(D5、D6)」と「国語>英語(D2)」である。この結果からは、閩南語に囲まれる環境の地域における家の中で閩南語を使わない者が現れたことと、英語が入り込んでいる家庭が存在することがわかった。しかし、実際に家でだれに対してもそういった言語使用の状況になっているとは限らない。この点については、「祖父母/両親/兄弟姉妹に対しては、何語を話しているか」という質問への回答から示される(表3)。

¹⁷ 2014年12月現在、嘉義県の老年化指数は147.72%であり、最も高い。内政部統計處(掲載日2015/01/17)「(中華民國)104年第3週内政統計通報((中華民國)103年底人口結構分析)」

[https://www.moi.gov.tw/stat/node.aspx?cate_sn=-1&belong_sn=5512&sn=5581] 2018年03月31日最終参照日。[調査時点で参照したURL：http://www.moi.gov.tw/stat/news_content.aspx?sn=9148]

表3 家族に対する使う言語の状況

対話者 使用言語	祖父母	両親	兄弟姉妹
国		D1、D6	D1、D5、D6、D7
閩	D2、D3、D4		
国>閩	D6	D7	
国と閩の混用		D4、D5	
国<閩	D1、D5、D7	D3	D3、D4
国>英		D2	D2

- ※ スペースの関係上、表3には、国語を「国」、閩南語を「閩」、英語を「英」のように表示する。
 ※ 空白になっているのは、その回答をした児童が1人もいなかったことを示す。
 ※ 「>」と「<」という記号は口が大きく開いているほうの使用状況が多いことを表す。しかし、言語の使用実態を明らかにすることが本稿の目的であるため、複数の言語を切り替える状況が生じる頻度の問題は分析対象としない。

表3から一見して明らかなのは、家で閩南語を使っていないと答えた者(D1、D2、D7)でも、対話者が自分より上の世代、とりわけ祖父母であるならば、閩南語を使用する傾向があることである。また、世代が下がるにつれて、国語の使用状況が多くなっていることもうかがえた。この結果は、台湾全地域の小学校2631校から、63校を抽出し、学校ごとに3、4、5学年に閩南語教育を受けている児童を対象に、言語使用の状況などの項目を調査した國家教育研究院(2011)が報告したことと一致している。つまり、対話者は祖父母、親、兄弟姉妹の順に、閩南語を使う頻度が低くなっている。また、こういった言語使用の状況は2004年10月から2005年2月にかけて台湾の大学生(1980-1986年生まれ)¹⁸を対象とした松尾(2006a)と同様の傾向になっている。この点からは、祖父母に対する閩南語を使う状況は、小学校における閩南語教育経験の有無や長さに関係しないことが推測される。

次に、特に祖父母に対して閩南語を用いる理由を示していく。なお、かぎ括弧がないのは筆者が複数の質問に対する回答をまとめたものであり、かぎ括弧があるのは児童が語ったことをそのまま引用したものである。また、インタビューでは「台湾語」という表現が使われた場合もあれば、ある言葉が閩南語で表現された場合もある。その内容を引用して示す際に、児童が使った表現のままに使用する。

《祖父母が国語能力を持たない状況》

- D2 「“阿公”“阿媽”¹⁹は閩南語しかわからないから。父と母は全部〔閩南語、国語、英語〕通じる。私たちは家でできるだけ国語と英語を使うのだ。英語は私が生まれて最初に習得していた言語だから」(〔 〕内は引用者、以下同様)
- D3 「“阿公”“阿媽”は国語がわからないから。父と母とは、やはり台湾語で話すことが多い。兄弟姉妹もそう。家族みんな、普段台湾語で話しているから」

¹⁸ 「調査協力者の小学校時代は言語政策の過渡期であり、ある調査協力者は小学校時代、すでに選択授業として郷土言語を学ぶ環境にあり、ある調査協力者の場合、小学校時代は郷土言語を話すことがはばかられたということになる」(松尾2006a, p.81)。

¹⁹ “阿公(a-kong)”と“阿媽(a-má)”という語は、祖父母に対する呼称である。前者は閩南語でおじいさん、後者は閩南語でおばあさんを指す。“阿公ら”という表現は“阿公”と“阿媽”二人のことをまとめて指す。

- D4 「“阿公” “阿媽” は、国語で言ったことを聞いてわからないから」
- D5 「“阿公ら” は国語が話せないから。あと、学校教育をあまり受けていない人に対しても、台湾語で話す」
- 《祖父母が閩南語のみを話す状況》
- D1 “阿公ら” はほとんど台湾語を話しているから。一方、父と母は普段、台湾語をあまり話していない。また、彼ら〔両親〕に対して台湾語を話したことがあるが、伝わらなかった。だから、“阿公ら” と話す時だけ、台湾語を使う。
- D6 国語を話すことに慣れているから、“阿公” “阿媽” と話す時に、国語を多く使っている。でも、世代が違うから、彼ら〔のような世代〕は普段、閩南語を話している。だから、“阿公ら” に対して閩南語をも使う。
- D7 「“阿媽” は閩南語だけを使っているから。父と母に対して国語を多く使うのは彼らが普段国語を多く話しているから」

上記の回答に下線を引いた部分からは、「祖父母が国語能力を持たない」および「祖父母が閩南語のみを使う」という 2 点を抽出できる。この結果により、祖父母に対する閩南語の選択と使用においては、祖父母の言語能力と言語使用の習慣が重要な要素として関わってくる事が考えられる。

また、D6 の回答からは、「祖父母の世代は、国語を話すわれわれの世代と異なって、閩南語を話している」ことを読み取れるのではなかろうか。つまり、「かれら祖父母の世代」と「われわれ国語を話す世代」の間に明白な境界を引いている。この点は注目に値する。なぜなら、これは児童は国語を話す世代としてのアイデンティティを固持するとともに、祖父母の言語習慣を配慮することによって、祖父母に対しては国語と閩南語の 2 言語を選んで会話をしていることが示唆されるためである。

以上のように、祖父母が国語能力を持たない点と祖父母が閩南語を使う習慣がある点により、彼らに対して閩南語を使うことは両親と兄弟姉妹よりも多いことがわかった。また、この結果と、およそ 10 年前に大学生を対象に調査した松尾(2006a)との結果と同様の傾向にあることから、若い世代にとって、閩南語と言え年配の世代、年配の世代が使う言語と言え閩南語のように、閩南語が年配の世代と結びつけられていると考えられる。

4.2. 学校

インタビューでは「学校で何語を話しているか」という質問に対して、D 小学校の協力者 7 名が全員、迷わずに国語だとすぐに回答した。この反応は、家庭内での言語使用に関する質問への反応とは違った。このことから、郷土言語教育は 2001 年から小学校に導入されてから 10 年以上経過しているにもかかわらず、校内における言語環境は依然として国語が優勢であると示される。学校で国語を使う理由については、次のとおりである。ただし、下記ではその理由を語った児童のみを示す。また、同一児童の回答を二回示したのは、その回答から複数の項目が抽出できたからである。

《学校の言語環境》

D3 「同級生みんな国語を話しているから」

D5 「みんなも国語で話している、私もみんなと国語を話すことに慣れている」

《友人／同級生の閩南語能力が低い状況》

D2 「閩南語が上手ではない友人もいるし、学校で国語を話すことに慣れているから」

《児童自身が国語を話す習慣を持つ状況》

D2 「閩南語が上手ではない友人もいるし、学校で国語を話すことにも慣れているから」

D5 「みんなも国語で話している、私もみんなと国語を話すことに慣れている」

D6 国語を使って話すことに慣れている。だから、学校でも基本的に国語を話している。

まず、最初に示した D3 と D5 に下線を引いた部分——「みんな国語を話している」からは、学校における国語の使用は、学校の言語環境は国語でありながら、仲間としての連帯感を「みんな」で共有していきたいことが推測される。次に、D2 の回答をみれば、これは、祖父母に対して閩南語を選んで使う理由と類似している。つまり、対話者の言語能力を配慮する観点である。しかし、同じく対話者の言語能力に対する配慮といっても、祖父母の場合は国語能力への配慮であるのに対して、同級生／友人の場合は閩南語能力への配慮である。このことから、世代間における言語使用や言語能力の差異がうかがえる。この点については、最後の3つの回答(D2、D5、D6)からも示されている。換言すれば、祖父母の世代では習慣的に使われるのは閩南語であり、児童の世代では習慣的に使われるのは国語である。さらに、とりわけ複数の理由を語った D2、D5 の回答からは、学校で国語が使われるのは、児童自身の言語使用の習慣をはじめ、対話者の言語状況、学校の言語環境、国語が使われる学校という共同体における国語使用の仲間意識の確認と共有など、複数の絡み合っている様子が見えてきた。

しかし他方で、校内では閩南語が使われる場面があることに注目されたい。インタビューでは閩南語の授業における言語使用の状況について質問をした結果、7名が全員、国語と閩南語と答えた。閩南語の使用状況は次のような回答から示される。

D1 先生は台湾語ばかり言うけど、僕は先生に対して国語と台湾語両方を使う。国語のほうが台湾語よりできるから、授業でよく使っている言語は国語だ。同級生と話す時も国語だけを使う。台湾語があまりできない同級生がいるから。

D2 学校で国語を話すことに慣れているから、授業中同級生と全部国語で話す。先生は閩南語を話すから、先生と話す時だけ閩南語を使う。でも、話せない時は国語で言う。

D3 先生は台湾語で話すけど、私たちが無反応や理解できていなさそうと見たら、国語に訳してもう一度言う。私は話せるし、授業だから、普通に先生と台湾語で話す。でも、同級生がみんな国語で話すから、同級生と話す時には国語を使う。

D4 「授業中、国語と台湾語両方とも使う。先生と話す時に国語をも使う。本文など、読ませる時だけ、台湾語を話す。その他は国語を多く使っている」

D5 普段みんなと国語で話してきているから、台湾語の授業でも国語で話す。先生と話す時だけ台湾語と国語両方を使うけど、台湾語のほうが多い。でも、授業が終わったら、先生とは国語で話すことが多い。授業が終わったから。

- D6 「閩南語先生と閩南語で話す。時々国語を話すこともある。同級生、友人とはやはり国語だ。慣れているから、みんなと国語で話すこと」
- D7 授業が終わったら、先生と国語で話す。でも、閩南語の授業中なら、授業だから閩南語を主に話している。閩南語を尊重しなければならないと思う。授業中は大部分は閩南語で、例えば挨拶をする時。たまに先生と国語を話すけど、国語を使うことは比較的少ない。同級生、友人と冗談を言ったり、彼らに甘えたい時に閩南語を話すけど、その他は全部国語だ。だから、学校では、閩南語の授業以外に、ほとんど国語を使う。

まず明白になったのは、閩南語の授業では、閩南語と国語の2言語が使われており、完全に閩南語の環境ではなく、閩南語の使用状況や場面が限られる傾向もある。閩南語が使われる状況は、具体的にあげると、①対話者が閩南語の授業を担当する教師(以下「閩南語教師」と略称)である時(7名全員)、②授業に関わる活動(D4、D7)、③冗談を言う時や相手と親しくなりたい時(D7)である。次に「閩南語教師が閩南語を使う(D1、D2)」、「自分自身が閩南語能力を有する(D3)」、「閩南語で行われる活動に参加する(D4、D7)」、「閩南語の授業だから(D3、D5)」、「閩南語の授業で閩南語を尊重する(D7)」といった回答内容から、児童が閩南語の授業中に閩南語を選んで使うことは「対話者・児童自身が閩南語を使う能力などの状況」、「閩南語で行われる場面」、「授業に対する尊重／認知」によって決まることが示唆される。その中で、最後の項目「授業に対する尊重／認知」は「閩南語の授業＝閩南語を話す」を意味しており、閩南語の授業が終われば、閩南語教師に対する使用言語が閩南語から国語に切り替えられることを反映していると考えられる。

このように、従来、国語が絶対的なものとして位置づけられていた学校内に、郷土言語教育の導入によって、閩南語などの言語が入り込んできていることが見られた。しかしながら、それが最も多用される状況は、郷土言語の授業でありながら、とりわけ郷土言語教育を行う先生と対話をする時である。言い換えれば、閩南語などの言語は学校内に「進出」することはできたが、郷土言語の授業という「枠」から抜け出せずに、郷土言語の授業で使われているというのが現状である。

5. まとめ

これまで示してきたように、台湾は外来政権による植民と移民などを通して築かれた多言語が併存している社会である。1990年代に至るまでは、国民党政府による抑圧的な単一言語政策が推進されたが、1980年代後半からは、台湾の本土化と民主化の進展に伴い、各エスニックグループによる母語の保護運動が展開され、言語教育政策も多様化を志向することとなった。現在、小中学校では、国語の他に、閩南語、客家語、原住民諸語、英語の教育が行われている。これにより、台湾の民主化が進んだ以降生まれた世代の人たちが、多言語に触れることが可能である。

2015年3月に閩南語が分布している嘉義県公立D小学校5年生児童7名を対象にインタビュー調査を行った。その結果、こういった若い世代の人たちが国語、閩南語や英語など、多言

語に触れて習得したが、それぞれの言語を使う状況が異なっていることが明らかとなった。家庭内において祖父母に対しては「国語<閩南語」を、両親に対しては「国語と閩南語の2言語」を、兄弟姉妹に対しては「国語>閩南語」を話す、といった3つのパターンに分けられる。それに加えて、場合によっては、英語の使用も見られた。また、学校内において、閩南語の授業中に閩南語の使用が多く見られたにもかかわらず、児童自身の言語使用の習慣、学校の国語環境や仲間意識によって、家庭内で閩南語を使って家族と対話する児童に、学校で主に国語を選択して使わせていた。つまり、学校では国語が圧倒的に使われているのである。このようにして、日常生活の中で、国語と閩南語この2言語の使い分けは均質的ではなく、様々な状況によって流動的となっている。また、閩南語が使われる場面は国語が使われる場面より限られている。

確かに、彼らは幼い頃から複数の言語を習得し、自由に言語を使うことができる時代に生まれた人たちである。一方、それぞれの言語をどの程度使えるようになるかは、その人の言語習得環境、親の言語観などが決定要因となる。また、児童たちがそれぞれの場において、どの言語を選択して使うかは、対話者、使用場面や本人自身の言語状況などによって変わっている。しかし、それはさらに、政府が制定した言語政策、歴史的・社会的状況などによる影響を受けつつあると考えられる。この点は、多言語社会における言語使用を調査した多くの研究(例えば、松尾 2006b、古閑 2009)でも同様に指摘されている。したがって、今日の台湾では、多言語教育が行われており、複数言語を操る能力を持つ人たちが増えていくことが予想される。しかし、国語が家庭内に浸透しつつある状況をみれば、これまで学校をはじめとして、公の場からさえも追い出された閩南語、客家語と原住民諸語が今後どの程度使用され、継承・発展していくかは、重要な課題の1つとして今後も議論され続けていくであろう。

主要参考文献

〔日本語文献〕

相川真佐夫(2010)「台湾における3つの言語政策」山本忠行、河原俊昭編『世界の言語政策 第3集—多言語社会を生きる』くろしお出版, pp.55-76。

東照二(1997)『社会言語学入門—生きた言葉のおもしろさにせまる』研究社出版株式会社。

小野原信善(2004)「1章 アイデンティティ試論—フィリピンの言語意識調査から」小野原信善、大原始子編著『ことばとアイデンティティ—ことばの選択と使用を通して見る現代人の自分探し』三元社, pp.15-51。

郭淑齡、石井由里(2015)「台湾の教育政策におけるグローバル化と伝統文化」『研究論叢・芸術・体育・教育・心理』第64巻, 山口大学教育学部, pp.1-13。

簡月真(2002)「台湾における言語接触」『社会言語科学』第4巻第2号, 社会言語科学会, pp.3-20。

古閑恭子(2009)「第4章 英語主義か多言語主義か—ガーナの言語問題」梶茂樹、砂野幸稔編著『アフリカのことばと社会—多言語状況を生きるということ—』三元社, pp.97-125。

菅野敦志(2013)「台湾の『拼音論争』とアイデンティティ問題—国際化と主体性の狭間で—」

- 『アジア太平洋討究』第20号, 早稲田大学アジア太平洋研究センター, pp.227-242。
- 田上智宜(2012)「書評 菅野敦志著『台湾の国家と文化「脱日本化」・「中国化」・「本土化」』菅野敦志著『台湾の言語と文字「国語」・「方言」・「文字改革」』『アジア経済』第53巻5号, 日本貿易振興機構アジア経済研究所, pp.119-123。
- 陳麗君(2011)「言語接触による言語変化と文法化現象の一例—台湾中国語“有”構文の分析を中心に」『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』第8号, 山形大学人文学部, pp.103-116。
- 松尾慎(2006a)『台湾における言語選択と言語意識の実態』群學出版有限公司。
- (2006b)「インドネシア華人社会における言語使用の実態」『社会言語科学』第8巻第2号, 社会言語科学会, pp.3-17。
- 山崎直也(2009)『戦後台湾教育とナショナル・アイデンティティ』東信堂。
- 林初梅(2009)『「郷土」としての台湾—郷土教育の展開にみるアイデンティティの変容』東信堂。
- Hsin-Yin, Wu(2010)「台湾における結婚移民女性に関する動向と支援策」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第50巻, 東京大学大学院教育学研究科, pp.23-33。

〔中国語文献〕

- 洪惟仁(2010)「台湾地區的語言分佈」『敲開語言的窗口：華語使用現象情況與調查』馬來亞大學・馬來西亞語言暨應用語言學系學術論文系列(二)聯營出版(馬)有限公司, pp.1-39。
- 黃宣範(1994)『語言、社會與族群意識—台灣語言社會學的研究』台北：文鶴出版有限公司。
- 黃毓超、李佩容(2014)「建構台灣母語線上社群與使用行為初探」『臺灣語文研究』第9巻第2期, pp.39-66。
- 林英津(2010)「第六章 原住民族語言政策的觀察：從『國語政策』到原民會的『族語認證』」黃樹民、章英華編『臺灣原住民族政策變遷與社會發展』中央研究院民族學研究所, pp.297-355。

〔ウェブ資料〕

- 行政院主計總處(2012)「(中華民國)99年人口及住宅普查—總報告統計結果提要分析」
 [https://www.stat.gov.tw/ct.asp?xItem=31969&ctNode=548&mp=4] 2018年2月26日最終参照日。
- 邱湘雲(2006)「海陸客家話和閩南語構詞對比研究」國立高雄師範大學國文研究所博士論文。〔行政院客家委員會研究助成金による完成、優秀な論文として行政院客家委員會學術研究館ウェブサイト掲載 <http://web3.hakka.gov.tw/ct.asp?xItem=27095&ctNode=1880&mp=1869>〕。
- 國家教育研究院(2011)「專案研究報告 臺灣地區國民中小學本土語言教學現況之整合型研究子計畫一、二：臺灣閩南語課程實施現況研究(A、B兩區綜合)期末報告」
 [http://teric.naer.edu.tw/wSite/ct?ctNode=648&mp=teric_b&xItem=1508972&resCtNode=453]
 2018年4月01日最終参照日。